# 東大病院だより

表題：海野溝山書

No. 51

CONTENTS

◆東大病院旧外来診療所アーケードに描かれた天井大壁画の謎
—制作者・寺崎武男の御子息、裕則氏に聞く—
〈東大病院の"遺産"シリーズ7〉……（加我）……2
◆病理部創立30周年記念式典　……（深山）……6
◆検査部創立50周年記念式典　……（矢冨・池田・戸塚）……7
◆東大病院創立150周年に向けて
第9回—内科、小児科、皮膚科初代教授—　……（加我）……8
◆先端医療開発研究クラスター 第1回シンポジウム開催される
—8月31日　安田講堂—　……10
◆東大病院サマーコンサート
モスクワ音楽院　アンドレイ・ピサレフ助教授ピアノコンサート開催される（8月24日）…12
◆元看護部副看護部長　新井晴代さん、秋の叙勲（瑞宝単光章）を受章　……13
◆東京大学医学部を退任するにあたって　……（江藤）…14
◆出　来　事……15
◆東大病院の四季　……16
◆平成17年度第1回「東京大学総長賞」受賞する　……16

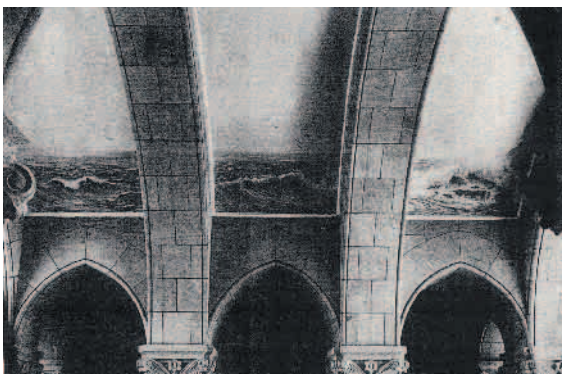
東京大学医学部附属病院
〒113-8655　東京都文京区本郷7丁目3番1号
東大病院の代表電話
☎03-3815-5411
東大病院のホームページ
http://www.h.u-tokyo.ac.jp/

# 東大病院旧外来診療所アーケードに描かれた天井大壁画の謎
## ―制作者・寺崎武男の御子息、裕則氏に聞く―

＜東大病院の“遺産”シリーズ 7＞

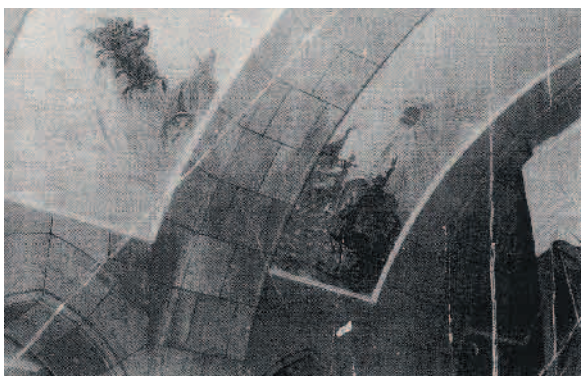
獨協中学時代の写真
（左）呉　健、（右）寺崎武男

現在の東大病院管理・研究棟という名称は、平成５年、現在の４階建ての新外来診療棟が完成するまで、外来診療所という名称で、各科の外来があった。この建物は昭和６年に着工し、７年かけて昭和13年に完成した。それまでは木造の病院があった。大正12年９月１日の関東大震災の火災により東大のキャンパスは医学部の医化学教室から始まり、基礎医学の各教室の建物が焼失した。さらにこの火は総合図書館、法学部の建物に延焼し、明治以来集積した標本や蔵書が失われた。東大病院は南研究棟を除く全ての建物が木造であったが幸い火災は生じなかった。しかし大震災後、東大キャンパスは内田ゴシックという現在の医学部、理学部、法学部などの象徴的な建物が次々と建てられた。東大病院の外来診療棟は、その頃世界大恐慌の直後で、わが国の財政も困難な状況であったが、復興計画の一つとしてこの巨大な建物が建設された。ただ建物を建てるのではなく、芸術的にも意欲的であった。バス通り側に面した最上階に大きなレリーフが北と南にある。北は“診療・治療・予防”作者は新海竹蔵（しんかいたけぞう）、南は“長崎への医学の伝来”作者は日名子實三（ひなごじつぞう）というものである。



1　北側アーケード正面から見て左側の創建当時の壁画

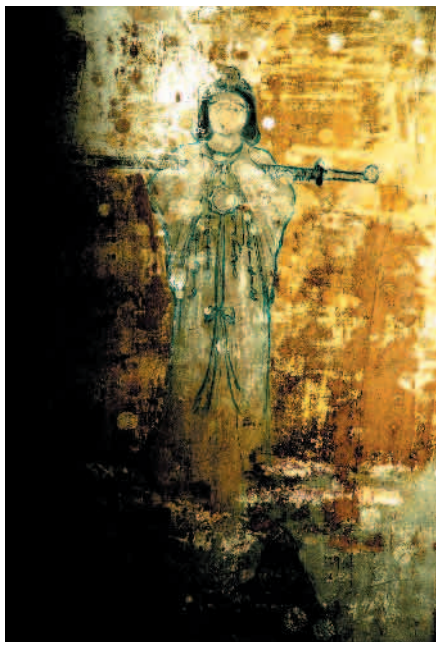
2　北側アーケード正面から見て右側の創建当時の壁画



3　２の拡大写真

4　南側アーケード壁画に記された寺崎画伯のサイン

寺崎画伯による第２外科第２代教授　塩田広重先生



5　南側アーケード正面から見て左側の現在の壁画（降魔の剣を抱く神）の様子

6

7　北側アーケード正面から見て右側の現在の壁画の様子

8

現在も東大病院を訪れる人は、この 2 つのレリーフを眺め、病院の古い歴史に強く印象づけられる。病院の１階には天井の高い 2 つのアーケードが北と南にあり、ちょうどレリーフの下に存在する。北のアーケードから入ると、内科研究棟や臨床講堂に至る。南のアーケードに入ると外来棟の裏から入院棟に至る。この 2 つのアーケードの天井を見上げると壁画が描かれていることがわかる。しかし、この壁画は70年もの間、雨風にさらされ、陽にあたり、また医学生の投げる野球のボールをぶつけられ、今や何が描かれているのか判読が困難になってしまっている。何が描かれているのか。剣を抱く神の像と馬上の人の像などが微かに読めるような部分がある。その意図は何であったのか。一部に TAKEO TERASAKI とサインが書かれておりこの大壁画が、寺崎武男氏の作であることがわかった。東大出版会の“博士の肖像”によると東京芸大出身の壁画家であることと現在の管理・研究棟 3 階階段スペースに同氏の作による肖像画が現有していることがわかったが、それ以上の手がかりがない。

※北側アーケードの天井画（1、2、3、7、8）
　南側アーケードの天井画（4、5、6）

に々人るけづたい
く囁を「生更」
るれか描にドーケーアの院病大帝
畫壁大の生畢伯畫崎寺

寺崎画伯の大壁画完成を伝える当時の新聞

豪壯の壁畫と
絢爛・呉教授の大作
藝術殿堂を誇る付屬病院
「更生」の相と力を
寺崎畫伯抱負を語る

帝国大学新聞　昭和８年５月１日

東大病院だより編集委員会では、寺崎武男が千葉県安房郡に晩年過ごし、平成15年に千葉県館山市立博物館で生誕120年記念企画展が開催されたこと、御子息の寺崎裕則氏が都内に在住であることを知り、10月25日に加我、三浦、水谷の 3 名で訪問した。寺崎裕則夫妻が沢山の資料を見せてくれた。その中で 2 つの資料が重大であった。一つは寺崎武男は獨協中学で呉　健と同級で、生涯親しい間柄であり、その中学生のときの写真があったことである。呉　健は内科学第 2 講座の 2 代目の教授でその内科書は内科の標準的な教科書であった。もう一つは、東大病院のアーケードの壁画の制作中の新聞の切り抜きである。この切り抜きを読んで、アーケードの壁画のタイトルが「文明の交流」で、ギリシャ、アラビア、中国、ヨーロッパ文明と日本の文化の交流を描いたもので、アーケードを通る患者に安らぎや希望を与えることを意図したことがわかった。ここに 2 つの新聞の切り抜きの内容をそのまま掲載し、当時の雰囲気を伝えたい。

寺崎武男の御子息の裕則氏は、舞台の演出家で、既に25年以上歌舞伎の中村鴈治郎や坂東玉三郎の数々の公演の演出をする一方、日本オペレッタ協会の会長を務め、日本オペレッタを定着させるべく、これも25年以上運動してこられた。父親の寺崎武男がイタリアのベニスに16年在住して、洋画家として活動すると同時に法隆寺の金堂の壁画を初めとし日本の絵画の研究も並行して行ってきた。2 代に渡って西洋と日本の文化の融合を理想としていることがよくわかった次第である。

インタビューは 3 時間にわたり、編集委員会としては初めてアーケードの壁画の由来が解明でき、報告できることを喜んでいる。

# いたづける人々に「更生」を囁く
# 帝大病院のアーケードに描かれる
# 寺崎画伯更生の大壁画

我国における壁画壇の重鎮寺崎武男氏により東京帝大附属病院の新装成ったビルディング外来患者診察所に日本最初の、しかも第一ともいうべきアーケード大壁画が着々完成に近づきつつある、診察所入口を中にして左右二つの高さ十メートルに及ぶ大アーケード、ここに書かれるのは病院に相応しく題して『更生』である、右は病魔にさいなまれるものが、れい明と共に、降魔の剣を抱く神の出現により新たなる生命を受け、喜びに舞う個人の更生の図である

左は逆まく怒涛に毅然と立つ巌、これに配して世界各国文化が日出る国日本の文化を謳歌して、太陽の如くこれを礼賛するという我国文化の進出を表徴し、文化研究を使命とする大学全般を意義づける図である、すべてフレスコセッコ式テンペラと称する純粋壁画であり、大和法隆寺の古代壁画を理想とする画伯が特に研究して作った絵具を用い、我国の気候に適した湿気吸収性を有してほとんど変色しないという特色を持っている

画伯がここに力作を残そうと思い立ったのは今から約四年前であった、芸術心の強い画伯の求むるものはただ『永遠に残るもの』のみであった、帝大復興建築を聞き、殊に現在のアーケードの設計を知るや、もうじっとしていられなくなった、小野塚総長に、内田営繕課長に氏は胸を開き、ついに氏の言を借りれば『ただ書かしてもらう』ということになったのである

その後練りに練った構図は小野塚総長の目を通り、新建築を待っていたのである、四月二十三日最初の筆をとった、その後いかなる日にも氏の黙々たる姿が大脚立の上に見られた、『天井に描く』という肉体的の苦労も氏を励ます感激の前に解消した、いたづきに悩む身をかかえてこのアーケードをくぐる人々はただ『何となく』この画を見上げた、しかしその絵筆の運びと共に描き出される輪郭のみによっても何かを現さんとする氏の努力は一脈の光となって人々の胸をついた、壁画に現れたその喜びはやはり更生の春を待つ人々にひびいたその喜びのささやきこそ氏の絵筆を動かすモーターにとなったのである

寺崎氏の壁画壇における地位はあまりにも有名である、日本画壇の耆宿故寺崎廣業氏を父に持ち、美術学校卒業後は全く壁画の研究に終始し、イタリアに十六年間遊んだ、明治神宮外苑絵画館に納められた『軍人勅諭御下賜の図』は氏の謹作であり、その他横浜岸壁貴賓室、医師会館にもその力作を残している

脚立の下に降り立った画伯は語る大学の各先生方の御好意により私の無理がかなって喜びながら仕事をつづけています、このような立派なアーケードは日本は勿論世界にだって余りありません、やがて病院の本建築が完成すればこのところが通路となる筈です、病気の人も、また一般の人々もこれを見ていくらかでも自身の生命に喜びを感じて下さればそれで結構です、画の完成は期限なしですが、大体この秋ぐらいには出来上がると思います、なお単に美術的にいってもアーチは景色を見る額縁ともいうべきです、この点だけでも場所といい設計といい申分のない所です、私としては神宮壁画と共に一生の事業のつもりです
【写真ー壁画の一部ギリシャ（左）エジプト、インド、支那（中央）アラビア、ヨーロッパ（右）の各文明が日本（太陽）を礼賛する図と寺崎画伯】

▲本誌４頁左上段記事　寺崎画伯の大壁画完成を伝える当時の新聞より

# 病理部創立30周年記念式典

病理部
深　山　正　久

病院病理部は今年、創立30周年を迎え、去る 9 月30日に記念式典を赤門学士会館分館で行いました。なお、病院病理部の前身である中央検査部病理検査室は、検査部と同時に1955年に発足しているので、それを含めると50周年ということになります。

式典に先立って、前病理部長、町並陸生東大名誉教授に「病理部の歴史」、病理学教室 OB で癌研病理部加藤洋先生に「消化管病理診断」に関する記念講演をお願いしました。いずれも現在の医療において病理診断が果たす役割を浮き彫りにする、意義深い講演でした。

記念式典では、まず病院長永井良三教授からご挨拶をいただきましたが、医療の安全性、科学性を保証する病理診断の重要性のご指摘がありました。次いで外科部門を代表して臨床系専攻長加我君孝教授は、19世紀の有名な「ウイルヒョウ誤診事件」（ドイツ皇帝フリードリッヒⅢ世の喉頭腫瘍の病理診断、治療を巡る事件。平和主義者の彼の死によってドイツは普仏戦争、第一次世界大戦へと突入していき、そしてヒットラーの登場にもつながっていく。）を引かれ、病理診断の適否が個人の運命だけではなく世界の歴史を変える可能性さえもあると、病理診断に取り組む我々を激励して下さいました。引き続いて行われたパーティでは、臨床系教授、病理学教室 OB が、過去、現在、将来の病理診断、人体病理学について大いに語り合い、大変有意義で楽しい会となりました。

## 病院病理部とは

さて、病院病理部は、直接、患者様と対面しないことから、その存在は表立って目立つことはありませんが、患者様の治療に重要な役割を果たしています。小説「白い巨塔」では財前教授の手術、その後の治療の適否が問題になりましたが、彼の敗北を決定付けたのは「病理診断をしていない」ことでした。癌を始めとした病気の診断をつけるため、患者様の体から組織を採取して病理診断をしなければならない場合が、どうしても生じてきます。また、手術、化学療法、放射線療法など治療の適否の判断にも重要です。

東大病院では、年間 1 万 5 千件の組織診断、2 万件の細胞診断が下されていますが、こうした病理検査は専門の病理医、細胞診スクリーナー、病理技術者が共同して担当し、その最終診断は病理医が責任をもって臨床医に伝えています。

## 迅速で安全、正確な病理診断を目指して

病院長も常日頃、医療の安全性、科学性、迅速性を強調されていますが、病院病理部でも現在、取り組みを強めています。迅速標本作製装置導入によって、従来一日工程であった病理標本作製を 3 時間に短縮化し、臨床への診断報告に要する時間も画期的に短縮しています。また、検体受付、診断確認のダブルチェックによって、確実な精度管理を行っています。

病理診断には高度の専門知識、経験が必要ですが、同時に各診療科の臨床医との共同の検討も必要です。このため、胸部、上部消化管、肝臓、胆膵、乳腺、内分泌、婦人科、泌尿器、脳外科、整形外科、皮膚科疾患などの疾患について、病理医が参加して症例を検討するカンファランスが日常的に病院内で行われています。こうして質、精度の高い病理診断を保証しているのです。

## 病理解剖とは

病理部は、病理解剖も担当しています。病理解剖は、治療の効なくしてお亡くなりになった患者様のご遺族にご許可をいただいて、ご遺体を解剖し、診断、治療の適否を検討するものです。医療の自己点検のみならず、医学教育、研究に役立つ、重要な意義を持っています。東大病院では、年間100体余りの病理解剖が行われています。また、その症例をもとに毎月、病院内でカンファランスが開かれ、研修医も参加して診断、治療のあり方を検討しています。

## 今後の病理部

中央診療棟Ⅱ期工事が完成すると、来年度には病理部も地下 2 階と地上 7 階のフロアーに移動します。30周年をけじめとして、東大病院、そして日本の医療に貢献できるよう、さらに努力していきたいと思いを新たにしています。

記念式典、写真左上は永井病院長、左下は菅野癌研名誉所長

記念誌

# 検 査 部 創 立 50 周 年 記 念 式 典

## ― 中原一彦教授退職 ―

検査部
矢　冨　　裕
池　田　　均
戸　塚　　実

お陰様で、私ども東大検査部は、本年創立50周年を迎えることができました。また、本年 3 月をもちまして定年退職されました中原一彦教授は、ちょうど創立40周年の年にご着任されましたので、まさにこの10年、東大検査部は中原先生とともに歩んだことになります。東大検査部の歴史を振り返り、また、この10年検査部の発展に御尽力いただいた中原先生に感謝申し上げ、加えて、検査部の将来を展望させていただくべく、2005年10月22日午後 4 ― 8 時、学士会館において上記記念式典を開催させていただきました。土曜日で悪天候にもかかわらず、約160名の方々のご出席をいただきました。

池田　均（副部長）の総合司会のもと、まず、最初の 2 時間は、記念講演会として歴代検査部長、現役検査部長・技師長が講演させていただきました。山中學元部長、大久保昭行元部長のお話からは、幾多の困難を乗り越えて現在の検査部の基礎を築かれた諸先輩のご苦労、そして、東大検査部の歴史の重みを実感させていただくことができました。また、中原一彦前部長からは、検査部さらには中央診療部門にとって厳しい状況が続いたこの10年間を振り返っていただきましたが、改めて、輸血部、感染制御部、病理部とのいわゆる四部体制の実現に努力されるなど、中央診療施設における検査部門の発展強化に多大な貢献をされました中原先生のご苦労が実感されました。次に、昨年 4 月に信州大学から東京大学に赴任した戸塚実（技師長）より、東大検査部の現状紹介とともに、外から見た東大検査部への期待感の話、本年4月に就任した矢冨裕（部長）からは、東大検査部の将来展望の話をさせていただきました。

午後 6 時からの 2 時間は、懇親会を開催させていただきました。まず、廣川信隆研究科長、名川弘一副病院長から、ご祝辞を賜りました。東大の検査部への期待感、さらには、中原先生への感謝のお気持ちを、お心のこもった言葉でお話しになられました。次に、山中先生のご発声で乾杯となり、以後は、なごやかな雰囲気の中、会は滞りなく進行しました。日本の臨床検査をリードされてこられました河合忠先生（自治医科大学名誉教授・国際臨床病理センター所長）、さらには、現在、日本臨床検査医学会会長の要職を務めておられる渡辺清明先生（慶應義塾大学名誉教授）からご祝辞を賜りました。東大検査部に対するご自身の思い出や期待感、そして、中原先生に対する感謝のお気持ちを述べられました。また、永井良三病院長、勝山努信州大学病院長をはじめとして、多くの方々からお心のこもった祝電を賜り、これを披露させていただきました。

その後、中原先生から、ご挨拶をいただきましたが、誠心誠意努力されてこられたこの10年間そのままのお話しでありました。改めて感謝の念を抱きましたのは、私どもだけではないと感じております。お話の後、中原先生とご苦労をともにされた眞重文子前技師長から花束の贈呈がありました。

最後に、矢冨が閉会の辞を申し述べさせていただきましたが、改めて、東大検査部の諸先輩が我が国の臨床検査医学において果たしてこられた重大な役割を実感するとともに、その責任の重さを痛感した次第であります。

多くの方々のご協力のお陰で、冒頭に述べさせていただきました本記念式典の目的は十分に達成することができたと考えております。検査部一同、中原部長時代からのスローガンである**「奉仕・協調・前進」の精神**を忘れることなく最善を尽くすつもりです。今後とも皆様方のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

花束を受け取られた中原一彦先生

### 中原一彦教授、検査部この10年の歩み

| | |
|---|---|
| 平成 8 年 | 生理機能検査室の整備・移転 |
| | 生理機能検査室総合受付設置 |
| | **技師の中央化** |
| | **検査部・輸血部・病理部の一体運営** |
| 平成 9 年 | 「東京大学医学部および附属病院における改革案」の策定 |
| 平成10年 | 総合検体検査搬送システム予算認可 |
| 平成11年 | **総合検体検査搬送システム稼動** |
| 平成12年 | 輸血部と合同で技師による輸血当直開始 |
| 平成13年 | 細菌検査室を感染制御部のもとへ移設 |
| | 本院と分院の統合、新入院棟の完成 |
| | 中型搬送システム、緊急検査エアシュータ開始 |
| | 消化器内科へ腹部超音波技師派遣開始 |
| 平成14年 | 東京大学医学部附属看護学校の閉校 |
| | 病棟検査部門の新設 |
| | 国立大学附属病院間での技師人事交流開始 |
| | **国立大学医学部附属病院マネジメント改革案（提言）** |
| 平成15年 | 病棟に翌日検査予定の採血管準備開始 |
| 平成16年 | 国立大学の法人化 |

# 東大病院創立150周年に向けて

## 第9回―内科、小児科、皮膚科の初代教授―

### 1．内科学教室

33歳で帝大医科教授、39歳で第１内科教授に就任し41歳で退官した佐々木政吉－日本人臨床教授第一号－

佐々木政吉教授

佐々木政吉は安政２年（1855）江戸本所に生まれた。旧姓・中田。幼い時より学業を好み、塾でも一番であった。実家は貧しく教育費を出すことが困難であった。９歳の時に名医で名高い佐々木東洋の養子となった。

明治４年（1871）東京医学校に入学し、明治12年（1879）に同級生20人の中で２番で卒業した。同級生には眼科の初代教授となった梅錦之丞、産婦人科の初代教授となった清水郁太郎がいる。卒業成績が１・２番まで官費留学を許された。しかし、父親の医師・佐々木東洋は官費留学になると大学に縛られることを心配し、私費留学を勧めた。翌年の明治13年（1880）より17年（1884）までの５年間ベルリン大学に留学した。主に病理学を研究した。ベルリン大学の病理学の教授は Virchow であった。明治19年（1886）帝大医科教授となった。33歳のことである。日本人の教授として第一号である。それまではドイツ人教師が内科を教えていた。明治26年（1893）39歳で第一内科の教授に就任したが、明治28年（1895）41歳で退官した。その後任がわが国の内科の重鎮となる三浦謹之助である。佐々木政吉は第一内科の教授を辞職すると同時に、父親の杏雲堂病院の院長となった。肺結核を専門とし杏雲堂病院は東京で最も有名な私立病院として発展した。佐々木政吉の聴診は天下一品と称され大きな名声を得た。一般の人々のために「冷水摩擦と健康法」の話をよくした。結核の治療のために大気安静療法の必要性を感じ、平塚に分院を建てた。62歳で病院を退いた。昭和14年（1939）85歳で亡くなった。佐々木政吉の胸像が初代の東洋と並んで現在の杏雲堂病院の玄関に置かれている。その養子が佐々木隆興である。杏雲堂病院は佐々木研究所を併設させ、癌の実験病理を行い人工癌の研究で大きな成果をあげる。佐々木隆興は明治35年（1902）東京大学医学部を卒業し、明治38から43年の５年間ドイツのストラスブルク大学とベルリン大学で研究をした。大正２年から５年まで京大の内科学の教授として勤めたが、その後杏雲堂病院の院長として内科の臨床と佐々木研究所での人工癌の研究に打ち込んだ。アゾ色素による人工癌が高く評価される。佐々木研究所は民間の研究所として優秀な人材を東大病理学教室より集め癌の研究で大きな成果をあげた。吉田富三の吉田肉腫もその一つである。東大医学部本館３階にある解剖標本室にはアゾ色素、バターイエローによる人工癌、吉田肉腫の病理標本が展示されている。

現在の杏雲堂病院、日大駿河台病院と明治大学の間にある

杏雲堂病院はお茶の水駅より徒歩３分の駿河台にある。

参考：杏雲堂病院百年史

### 2．小児科学教室

31歳で初代の小児科学教授に就任し31年間活躍した弘田　長

弘田　長教授

安政６年、土佐国幡多郡中村町に生まれた。明治４年13歳の時に父に伴われて上京し、その年の11月に大学東校へ入学した。ドイツ人医師のミューラーとホフマン

が教えた時の頃である。明治10年東京大学が創立、東京大学医学部本科生として在学。明治13年、22歳で医学部を卒業した。卒業後に外科当直医となった。ベルツ、スクリバの助手となったが、明治14年に熊本医学校の外科の教諭となった。明治10年の西南の役の後のことである。弘田の 4 ヶ月前に、後に産婦人科の初代教授となる浜田玄達が外科医として赴任していた。明治16年付属病院長を兼務。明治18年27歳の時に自らの強い希望で私費でドイツへ留学した。ストラスブルク医科大学に入学し、小児科のコーツ教授について小児科学を学んだ。レックリングハウゼンに病理学、ホッペザイルに病理と生化学を学んだ。明治21年帰国し、小児科嘱託となり、初めて小児科学が講義のされるようになった。明治22年31歳の時に小児科の教授となった。学位論文は「脚気婦人乳は小児に害あり」で東京医学会雑誌に発表された。明治34年小児科学会の会頭となると同時に「治癒すべき脳膜炎について」の論文を発表した。翌年宮内省御用掛兼務を仰せつけられた。医科大学教授で宮中に招かれたのは初めてのことであった。大正10年内規による定年制が行われ退職した。教授として34年の間、活躍した日本の小児科学のパイオニアであった。

弘田　長教授は短歌で気持ちをよく表現した。

**ストラスブルグより**

**聞きなれし　御寺の鐘に　思出の**
**いやまさり来る　此夕かな**

**医学部卒前に亡くなった次男について**

**亡せし子が　朝夕より　文机に**
**インキ染みしまま　のこれる筆はも**

**大学の　池添の道　若人の**
**くる人ごとに　吾子とし見ゆ**

昭和 3 年古希の年に、斉藤素厳作の銅像完成。東講堂で除幕式が行われた。その後病室の中央階段に安置されている。享年の前の年に左半身不随となり、心疾患のために70歳で亡くなる。剖検は長与又郎教授によってなされた。その脳は東大総合博物館の傑出人の脳のコーナーに保管されている。脳重量は1330g、右側頭葉に陳旧性の梗塞を認める。

参考：東大小児科の生い立ち。東大小児科学教室の昭和34年。

## 3．皮膚科学教室

29歳で初代教授に就任し 1 年後亡くなった　村田謙太郎（1891-1892）と第 2 代教授の宇野　朗（1892-1897）

外国人お雇い教師ミューラー（明治 4 年）、シュルツ（明治 8 年）、スクリバ（明治14年）が、外科の一部として皮膚科学が第一医院で講義が行われた。

村田謙太郎訳の皮膚科の教科書

村田謙太郎は文久 2 年（1862）に生まれ、明治17年（1884）卒業した。卒業生の総数はわずか13名であった。卒後、ベルツの助手となった。

明治21年官費留学生としてドイツで 3 年間学んだ。明治23年（1890）帰国し、第一医院（現在の東大病院）皮膚病黴毒科が開かれた。この年に講師として任命されこれがわが国の大学としての皮膚科の最初となった。村田謙太郎は翌年の明治24年（1891）、29歳で皮膚病黴毒学教授に任命された。しかし、その翌年の明治25年（1892）に逝去した。わずか30歳のことで肋膜炎が原因であった。村田謙太郎初代教授については写真も銅像も残されていない。訳本の「皮膚科黴毒論」は本人の蔵書印があり、明治21年の発行である。その後外科の宇野　朗が兼担した。

2 代目の宇野　朗教授は嘉永 3 年（1850）江戸に生まれた。明治 9 年（1876）、東京医学校を卒業した。明治 9 年は鉄門名簿には最初の卒業生として掲載されており、卒業生の数は31名、外科を学んだ。明治22年（1889）より 3 年間ドイツに留学し、外科だけでなく皮膚科も学んだ。村田謙太郎教授が急逝したために、明治26年（1893）に皮膚科黴毒学の教授となった。しかし 4 年後の明治30年（1897）に健康上の理由で退官した。翌年に、やはりドイツ・オーストリアで皮膚科学を学んだ土居慶蔵が31歳で第 3 代教授に就任し、わが国の皮膚科学が花開くことになる。

参考：東大皮膚科百年のあゆみ．東大皮膚科学教室発行
平成 3 年発行（非売品）

# 先端医療開発研究クラスター 第1回シンポジウム開催される

## 8月31日　安田講堂

安田講堂で、8 月31日午後、先端医療開発研究クラスター第1回シンポジウムが開催された。クラスターとは英語で「房」を意味する言葉であり、それから転じて数個から数百個（場合によりそれ以上も含める）単位での集まりという意味である。東大医学部・東大病院には伝統的な基礎医学、臨床医学各科のほかに寄附講座14、疾患生命工学センター 7 部門、21席 COE の研究拠点 2 つ、文部科学省人材養成ユニット 3 つ、文部科学省科学技術振興調整費研究ユニット1つ、医工連携部のプログラム18ある。プログラム1つ1つを星に例えると合計50からなる“星座”を紹介し、かつ組織的な求心力を持たせることを意図したシンポジウムである。季節は夏の終わりであったが、安田講堂1階は満員であった。特にプログラムにある特別講演の立花隆先生の報告はヒトの脳の機能を補ったり治療したりする欧米の技術の最新報告で、その進歩の到達レベルは聞く者を圧倒した。立花先生も熱が入り、予定の 2 倍の時間を費やしたほどである。終了し安田講堂を出ると、外は暗く、東大キャンパスの空には星が輝いていた。なお、立花先生の報告の一部は11月 5 日、NHK スペシャル「サイボーグ技術が人類を変える」で報道された。

## 院長ご挨拶

# 先端医療開発研究クラスターの発足に当たって

東京大学医学部附属病院
病院長　永　井　良　三

科学技術の進歩により、創薬、再生医療、遺伝子治療、ロボット医療、手術機器開発などの先端医療がめざましく発展しています。これらの医療技術は医学と他分野の融合によって生み出されてきました。東京大学大学院医学系研究科と附属病院でも、多くの研究者が工学、薬学、基礎生命科学の研究者とさまざまな共同研究を進めています。遺伝子、分子、細胞、個体と多段階の階層での検討を経て、一部では臨床への応用も始まっています。

大学院医学系研究科には平成15年度に疾患生命工学センターが発足し、医学と工学の連携の場として活動を開始しました。附属病院では、医学、工学、薬学の研究者がペアを組んで院内に18の共同研究室を設置し、医工連携部としてスタートしました。その他の新しい組織としては、21世紀 COE、振興調整費による人材養成ユニットや研究プログラム、再生医療をめざすティッシュエンジニアリング部、多くの寄附講座、22世紀医療センターなどの研究ユニットが新しい診断法と治療法の開発をめざして活動しています。

これらの研究ユニットはこれまで独立して活動してきましたが、相互の連携と社会への広報を強化するために、東京大学先端医療開発研究クラスターとして集結することになりました。これによって医療現場のニーズと工学や薬学のシーズがめぐり会う機会が増え、研究も活性化すると期待しております。

東大病院はひとつの街です。年間の新入院患者数は 1 万 8 千人、外来患者数は70万人に及びます。研究成果を実用化する臨床現場、多彩な研究者、互いに切磋琢磨できる研究環境はまさに銀河集団に喩えることができます。今回発足した先端医療開発研究クラスターは日本のトランスレーショナル研究の拠点として、常に新たな星を生み出せるよう努めていく所存です。皆様のご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

### 先端医療開発研究クラスターシンポジウム開催次第

総合司会：門脇　孝　医学部附属病院副院長

開会挨拶　廣川　信隆　大学院医学系研究科長
挨　拶　永井　良三　医学部附属病院長
「クラスター発足にあたって」
基調講演　赤林　朗　大学院医学系研究科医療倫理学教授
「先端医療開発研究と倫理―トランスレーショナルリサーチの推進に向けて」
講　演　佐久間一郎　大学院新領域創成科学研究科教授
「手術の精密化を支援する手術ロボット開発」
高戸　毅　医学部附属病院ティッシュ・エンジニアリング部長
「ティッシュ・エンジニアリング部における再生医療への取り組み」
夏苅　英昭　大学院薬学系研究科客員教授
「創薬研究―大学に何が期待されているか」
小山　博史　大学院医学系研究科　クリニカル・バイオインフォマティクス特任教授
「臨床研究における情報基盤整備」
特別講演　立花　隆　評論家・ジャーナリスト

# クラスターを構成する研究組織の名称と責任者・内線番号

## ■寄附講座（順不同）

| No | 講座名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| 1 | 加圧トレーニング・虚血循環生理学講座 | 中島 敏明 助教授 | 35653 |
| 2 | 関節疾患総合研究講座 | 吉村 典子 助教授 | 35655 |
| 3 | 健康医科学創造講座 | 林 同文 助教授 | 35646 |
| 4 | 健診情報学講座 | 奥 真也 助教授 | 35648 |
| 5 | 腎疾患総合医療センター講座 | 要 伸也 助教授 | 35651 |
| 6 | 先端臨床医学開発講座 | 佐田 政隆 助教授 | 37150 |
| | | 川上 浩司 助教授 | 35642 |
| 7 | 統合的分子代謝疾患科学講座 | 山内 敏正 助教授 | 35640 |
| 8 | ホスピタル・ロジスティクス講座 | 苦瀬 博仁 教授 | 35657 |
| 9 | 免疫細胞治療学（メディネット）講座 | 垣見 和宏 助教授 | 23434 |
| 10 | 臨床分子疫学（田辺製薬）講座 | 後藤田 貴也 助教授 | 35644 |
| 11 | 医療環境管理学講座 | 上寺 裕之 助教授 | 35063 |
| 12 | 医療経営政策学講座 | 橋本 秀樹 教授 | 35660 |
| 13 | コンピュータ画像診断学／予防医学講座 | 林 直人 助教授 | 35664 |
| | 臨床運動器医学講座（エーザイ 株式会社） | 未定 | |

## ■疾患生命工学センター

| No | 講座名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| | 疾患生命工学センター（センター長） | 清水 孝雄 教授 | 23014 |
| 14 | 疾患生命科学部門（1） | 宮崎 徹 教授 | |
| 15 | 疾患生命科学部門（2） | 河西 春郎 教授 | |
| 16 | 医療材料・機器工学部門 | 牛田 多加志 教授 | 33898 |
| 17 | 臨床医工学部門 | 片岡 一則 教授 | 27138 |
| 18 | 健康・環境医工学部門 | 遠山 千春 教授 | （備考:国立環境研究所直通） |
| 19 | 研究基盤部門（動物資源研究領域） | 野本 明男 教授 | 23413 |
| 20 | 研究基盤部門（放射線研究領域） | 宮川 清 教授 | （備考:広大原爆放射線医科学研究所　ゲノム障害病理研究分野研究室直通） |

## ■ティッシュ・エンジニアリング部

| No | 講座名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| | ティッシュ・エンジニアリング部 | 高戸 毅 教授 | 33710 |
| 21 | 骨軟骨再生医療寄附講座 | 鄭 雄一 助教授 | 37014 |
| 22 | 血管再生医療寄附講座 | 小山 博之 助教授 | 37063 |
| 23 | 造血再生医療寄附講座 | 小川 誠司 助教授 | 30673 |
| 24 | 角膜組織再生医療寄附講座（アムニオッテク） | 山上 聡 助教授 | 37492 |
| 25 | 腎臓再生医療寄附講座 | 菱川 慶一 助教授 | 35725 |
| 26 | メニコン軟骨・骨再生医療寄附講座 | 星 和人 助教授 | 37386 |

## ■21世紀COE

| No | 研究拠点 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| 27 | 脳神経医学の融合的研究拠点（神経内科） | 辻 省次 教授 | 33780 |
| 28 | 環境・遺伝素因相互作用に起因する疾患研究 | 永井 良三 病院長 | 33100 |

## ■文部科学省人材養成ユニット

| No | ユニット名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| 29 | クリニカルバイオインフォマティクス研究ユニット | 永井 良三 病院長 | 33100 |
| 30 | 生命・医療倫理人材養成ユニット | 赤林 朗 教授 | 23509 |
| 31 | 医療ナノテクノロジー人材養成ユニット | 片岡 一則 教授 | 27138 |

## ■文部科学省科学技術振興調整費研究ユニット

| No | 開発名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| 32 | 分子機構に立脚した抗代謝症候群薬の開発 | 門脇 孝 教授 | 33101 |

## ■医工連携部

| | 講座名 | 氏名 | 内線 |
|---|---|---|---|
| | 医工連携部（心臓外科） | 高本 眞一 教授 | 33300 |
| No | プログラム名 | 氏名 | 内線 |
| 33 | 次世代三次元超音波技術の開発 | 高本 眞一 医・心臓外科<br>土肥 健純 工・情報理工学 | 33300<br>26350 |
| 34 | ヒト心筋細胞機能測定システム開発 | 高本 眞一 医・心臓外科<br>杉浦 清了 工・新領域創成科学 | 33300<br>28393 |
| 35 | 拍動周期技術を用いた心臓血管外科手術ロボットシステム | 高本 眞一 医・心臓外科<br>宮田 哲郎 医・血管外科<br>中村 仁彦 工・情報理工学 | 33300<br>33241<br>26379 |
| 36 | 半導体ナノ粒子を用いた腫瘍治療への応用 | 名川 弘一 医・腫瘍外科<br>山口由岐夫 工・化学システム工学 | 33240<br>27303 |
| 37 | 強力集束超音波を用いた腫瘍治療法の開発 | 名川 弘一 医・腫瘍外科<br>松本洋一郎 工・機械工学科 | 33240<br>26286 |
| 38 | マイクロサージェリーロボティクス・バーチャルシミュレーションラボラトリー | 森田 明夫 医・脳神経外科<br>光石 衛 工・産業機械工学 | 33341<br>26355 |
| 39 | 人工臓器の開発 | 成瀬 勝俊 医・人工臓器移植外科<br>酒井 康行 工・生産技術研究所 | 33321<br>21425 |
| 40 | 骨・関節疾患に対する新しい診断・治療装置の開発研究 | 中村 耕三 医・整形外科<br>土肥 健純 工・情報理工 | 33370<br>26350 |
| 41 | 分子イメージングラボ | 平田 泰信 医・循環器内科<br>長野 哲雄 工・薬学部薬品代謝科学 | 33052<br>24850 |
| 42 | 高分子ミセル型ナノ・バーティクルを用いたデリバリーシステムによる新しい血管疾患療の開発 | 小山 博之 医・血管再生医療<br>片岡 一則 工・工学系研究科 | 37063<br>27138 |
| 43 | 超音波キャビテーションによる非侵襲結石破砕 | 北村 唯一 医・泌尿器科<br>松本洋一郎 工・機械工学科 | 33560<br>26286 |
| 44 | 体幹部難治性癌に対する高精度定位 X 線治療システムの開発 | 中川 恵一 医・放射線科<br>山本 健二 工・化学システム工学<br>上坂 充 工 | 37400<br>27303 |
| 45 | 応用代謝工学研究室 | 永井 良三 医・循環器内科<br>多比良和誠 工・化学生命工学 | 33100<br>28828 |
| 46 | 血管医工学研究室 | 宮田 哲郎 医・血管外科<br>土肥 健純 工・情報理工学<br>佐久間一郎 工・新領域創成科学 | 33241<br>26350<br>27481 |
| 47 | バイオマテリアル解析室 | 高戸 毅 医・口腔外科<br>中村 耕三 医・整形外科<br>牛田多加志 疾患生命工学センター | 33710<br>33370<br>33898 |
| 48 | 硬組織ナノメディシン研究室 | 鄭 雄一 医・ティッシュエンジニアリング<br>星 和人 医・ティッシュエンジニアリング<br>片岡 一則 工・工学系材料科学 | 37014<br>37386<br>27138 |
| 49 | 診療プロセスのリスク低減支援システムの開発 | 山崎 力 医・クリニカルバイオインフォマティクス研究ユニット<br>飯塚 悦功 工・化学システム工学 | 35633<br>27298 |
| 50 | 難治性癌に対する中性子捕捉療法・免疫療法の開発 | 高本 眞一 医・呼吸器外科<br>中澤 正治 工・システム量子工学<br>江里口正純 工・先端技術センター | 33300<br>26972<br>55435 |

# 東大病院サマーコンサート

## モスクワ音楽院　アンドレイ・ピサレフ助教授ピアノコンサート開催される（8月24日）

東大病院のボランティアによるコンサートは、東京大学吹奏楽部学生による平成 5 年12月の第１回クリスマスコンサート（臨床講堂）に遡る。その後、新外来棟１階ロビーで、7 月の七夕コンサート、12月のクリスマスコンサートを中心とし、その間に１～2 ヶ月に１回程度ミニコンサートがある。今年の七夕コンサートはロシアのピアニストで、モスクワ音楽院助教授のアンドレイ・ピサレフ先生にお願いすることになった。ピサレフ先生は倉敷にある「くらしき作陽大学音楽学部モスクワ音楽院特別演奏コース」特任教授としてわが国でも教育と演奏活動を行っている。東大病院との縁は、かつて東大病院に入院経験のある本間仲子様の御紹介による。本間様は現在ロンドンとモスクワに在住している元オペラ歌手で現在はコンサートのマネージメントをされている。これまでプロの音楽家の演奏は小澤正爾指揮の合唱と東京芸大教授の田中千香士先生のバイオリン演奏だけである。

**プロフィール**：1962年ロシアの北のロストフ生まれ。15歳でモスクワ音楽院・中央音楽学校に入学。1983年ラフマニノフ・コンクール優勝。ステージの演奏は高貴で洗練されており、その技量は“ラフマニノフを彷彿させた”と評された。1991年ザルツブルグで開催された第5回国際モーツァルトコンクールで優勝。同年ブゾーニ国際コンクール第 4 位、及び

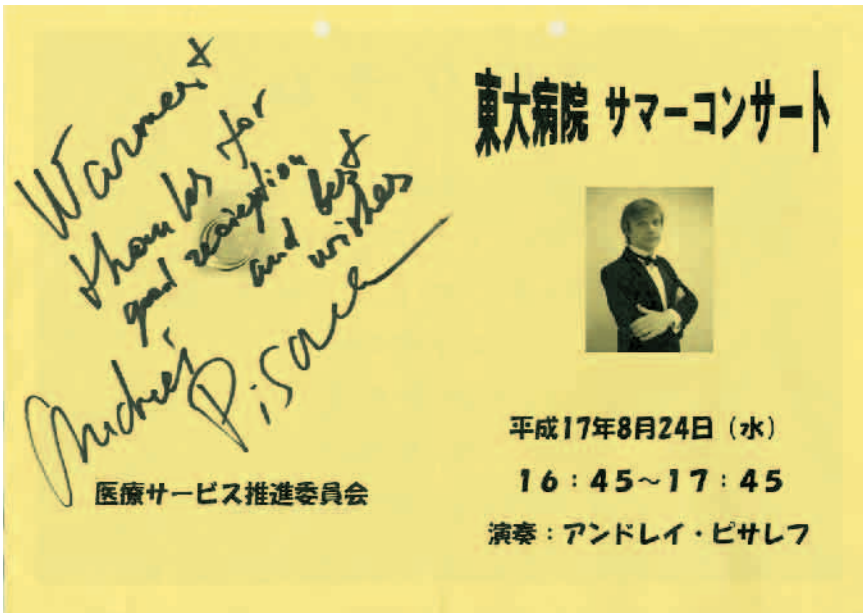
ピサレフ先生と本間仲子様

モーツァルト賞受賞。1992年プレトリア国際コンクール優勝。現在世界各地で演奏活動を展開している。演奏曲目は、①モーツァルト/ソナタ　ハ長調　第１楽章（K.545）、②シューマン／アラベスク　作品18、③リスト／ペトラルカのソネット　第104番＆第123番、④リスト／エステ荘の噴水、⑤リスト／愛の夢第3番、⑥ショパン／子守唄　作品57、⑦ショパン／スケルツォ第２番変ロ短調　作品31

外来はピサレフ先生の演奏を聴こうとする入院中の患者様を中心に人で一杯となった。最初から最後まで音楽性豊かで、繊細で、モーツァルトはよりモーツァルトらしく、リストはよりリストらしい素晴らしい演奏であった。アンコール曲はリストのラカンパネラであった。

その後、演奏を聴いた人の感想が届いた。その一つを紹介する。

『昨日は、外来でお世話になったうえ、素晴らしい演奏に居合わせることができました。聴衆側として聴くことが出来、患者として感謝しております。昨日はピサレフさんがこころをこめてあのピアノを演奏していました。真に上手な人が、純粋に患者さんのために弾いていることがピアノの端々から感じられて、最後、自然に涙が出てきました。こんな風に弾いて貰えて、さぞかしピアノもよろこんでいるだろうと。皆さん、音楽にこもった心は直に伝わります。慣れないクラシックに耳を傾ける患者さんの姿を見ました。（正直、昨日私は「患者の気持ち」になって



ピアノ演奏に耳を傾ける患者と職員

ピサレフ先生の演奏

跡片付をするボランティア

ピアノを元の位置に戻す職員

聴いていました。がんの患者さんと思われる方がボランティアの力で多数来ていらっしゃいました。）特にモーツァルトは・・・あれほどのものは生で初めてでした！すごかったです。ピアノってあんな音を出せるのかと。』

## 元看護部副看護部長　新井晴代さん、秋の叙勲（瑞宝単光章）を受章

平成17年秋の叙勲で、元看護部副看護部長　新井晴代さんが瑞宝単光章を受章されました。

新井さんは、昭和41年に手術部に配属となりその後、東大病院の再開発計画の新中央診療棟Ⅰ期計画における手術部及び材料部の運営に携わり、平成 5 年、新外来棟開設にあたっては、外来婦長の立場から幅広い作業を担当され、新しいシステム作りに参画されました。

東大病院のボランティア導入にあたっても活躍され、自ら PR のポスター絵を描いたほどです。
その後、平成10年の秋に分院の看護部長として赴任され、平成13年 6 月末に分院が全ての診療を休止するまでの間、本院と分院の組織統合の任に誠心誠意ご尽力されました。

統合後は、本院看護部副看護部長（質保証担当）として任にあたられ平成17年 3 月定年により本学を退任されるまでの長きにわたり公務にあたられ多大な功績を上げられたことにより今回の受章となりました。

新井さんの叙勲のご受章を心からお祝いすると供に、今後の益々のご発展とご活躍を祈念いたします。

# 東京大学医学部を退任するにあたって

リハビリテーション部
**江　藤　文　夫**

このたび東京大学を辞し、国立身体障害者リハビリテーションセンターに病院長として異動することとなりました。東大病院在職中はお世話になりました。しばらくは兼任をお認めいただき東大病院に顔を出すことになりますが、本務を離れますことから紙面をお借りして皆様のご厚情に感謝申し上げます。辞職に当たって、東大病院のリハビリテーション部について改めてご紹介させていただきたいと思います。

東大病院のリハビリテーション部は昭和38年 7 月、中央診療部に開設された運動療法室からスタートしました。リハビリテーションは20世紀半ばに医療のパラダイムが転換したことを反映して誕生した新しい医療と医学の領域です。医療技術の進歩により、救命率が高まりはしたものの、後遺障害のために病院や介護施設に依存して退院が妨げられる人口が増大しました。そこで、救命のための内科的治療や外科手術と平行して日常生活に必要な最大限の機能回復も医学の課題として意識されました。それは病気の重症度を「普通の人と同じように歩ける、自分で衣服の着替えができる、すべてに誰かの介助を必要とする」などといった日常的な活動能力で表記する方法の普及とも共通します。

ライフサイエンスは生命科学と訳されますが、英語でライフを論じるときには生命だけでなく、生活や人生についてのニュアンスもあります。救命と同時に生活能力を救出することも医療人の仕事と考えます。もし自分の足で歩くことができなくても車椅子を使いこなすことで、移動能力は達成されます。しかし、病院の中では車椅子で動き回れても、いったん町に出るとさまざまなバリアの存在に気づかれます。したがって、リハビリテーションのための技術は医療の枠組みにとどまるものではありません。病気や健康に対する社会的認識によってもニーズは異なります。生きている限りは自分の意志で社会参加を実行したいという患者さんの意欲や行動様式が前提となります。病院での寝たきり生活に満足される方には、あまり必要を感じられないかもしれませんが、早く退院して自宅で生活したい方にはリハビリテーション医療が役に立ちます。わが国でも人口の高齢化や社会的な構造変化とともに、最大限の機能回復により自立生活を支援する医療サービスへの要望は急速に拡大しています。こうした医療サービスは医師と看護師だけでなく、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床（医療）心理士、義肢装具士、医療ソーシャルワーカーといった新しい医療職、すなわちコメディカルとのチームにより取り組まれます。

かつては予防医学、治療医学に次ぐ医学の第 3 相の考え方が導入されましたが、今日では障害の予防と機能回復への治療的取り組みが強調されます。東大病院のように先進的で急性期医療に特化した病院では、臥床安静に伴う障害の予防と全身体力の早期回復により円滑な退院を促進することが求められています。東大病院では先進的なリハビリテーション医療の提供を目的に活動が開始されましたが、公式の名称は長らく理学療法部にとどまっていました。平成13年 4 月に、大学院医学系研究科にリハビリテーション医学分野が設置されたことに伴い、本来目的とする名称への変更が文部科学省より認められました。

機能回復の最大限の可能性を達成して、早期退院を目指すことはすべての医療人の仕事と考えられます。現代医療は臓器別に専門分化を促進することで診断と治療技術を飛躍的に発展させてきました。細分化された専門診療と研究に追われる先生方にも患者さんの生活は関心事であるはずですので、障害を標的とした横断的な診療部門の活用をお願いいたします。おかげさまで、この数年、院内でのリハビリテーション部の認知度も高まり、診療件数は飛躍的に増大してきました。そのことでスタッフも多様な障害に出会うことになり、新しいリハビリテーションのニーズに対応した技術の開発にも取り組む機会を持つこともできます。各診療科ならびに病院の皆様の温かいご理解とご支援によりリハビリテーション部が充実し、東大病院の発展に寄与することを願っております。

## 略　歴

| | |
|---|---|
| 昭和47年 3 月 | 東京大学医学部医学科卒業 |
| 昭和47年 6 月 | 東京大学医学部附属病院研修医（内科系） |
| 昭和49年 6 月 | 東京大学医学部老年病学教室　医員 |
| 昭和50年 3 月 | 東京大学医学部老年病学教室　助手 |
| 昭和53年 5 月 | 東京大学医学博士学位授与 |
| 昭和55年 1 月 | 英国バーミンガム大学医学部老年医学留学 |
| 昭和59年 3 月 | 東京大学医学部老年病学教室　医局長 |
| 昭和59年10月 | 東京大学医学部病院講師（理学療法部） |
| 昭和60年 9 月 | 東京大学医学部病院理学療法部副部長 |
| 平成 5 年 4 月 | 獨協医科大学リハビリテーション科学教室　教授 |
| 平成10年 9 月 | 東京大学医学部教授（病院理学療法部） |
| 平成13年 4 月 | 東京大学大学院医学系研究科教授（リハビリテーション医学分野） |
| 平成17年10月 | 国立身体障害者リハビリテーションセンター病院長 |

# 出　来　事

## 平成17年 8 月～10月

**8月8日（月）蘭州大学関係者東大病院見学**

蘭州大学　李発伸学長、第二医院　孫正義院長、材料科学系　王育花教授が本院を見学された。

**8月12日（金）第2回ＡＥＤ講習会**

時間：13：00～18：00
場所：入院棟A15階大会議室
院内に設置された AED を迅速かつ適切に使用するために院内教職員を対象として第2回目の講習会が開催された。

第2回 AED 講習会修了者

**8月15日（月）**
**リスクマネジメント研修（講演会）**

時間：18：00～19：30
場所：入院棟A15階大会議室
演題：医療安全への終わりなき挑戦
講師：武蔵野赤十字病院心臓血管外科・呼吸器外科副部長　菅野隆彦氏
（医療安全管理対策室）

**8月24日（金）東大病院「サマーコンサート」**

時間：16：45～17：45
場所：外来棟1階玄関ホール
演者：アンドレイ・ピサレフ氏
モスクワ音楽院助教授、くらしき作陽大学特任教授（ピアノ）
主催：医療サービス推進委員会
（詳細は、サマーコンサート掲載ページ参照）

**8月31日（水）**
**先端医療開発研究クラスターシンポジウム**

時間：16：00～19：30
場所：安田講堂
（詳細は、先端医療開発研究クラスターシンポジウム掲載ページ参照）

**9月2日（金）東大病院総合防災訓練**

時間：14：00～16：30
場所：入院棟Ｂ6階・入院棟Ａ・旧中央診療棟救急外来
訓練内容：
東京において直下型地震が発生し、マグニチュード7.0、震度6強の激震が発生したことを想定して、本郷消防署の協力を得て合同の総合防災訓練を実施した。
消火通報避難訓練　実施場所：入院棟Ｂ6階
消火器使用による消火訓練　実施場所：
看護職員宿舎3号棟横空地
トリアージ訓練　実施場所：
入院棟Ａ・旧中央診療棟救急外来

**9月7日（水）**
**リスクマネジメント研修（講演会）**

時間：18：00～19：30
場所：臨床講堂（食堂「カワナ」上）
講師：日本大学医学部法医学教室教授
押田茂實氏
演題：最近の医療事故とリスクマネジメント
ーヒヤリハット劇からの教訓ー
（医療安全管理対策室）

**9月9日（金）救急業務協力者表彰**

救急の日（9月9日）にあたり東京都福祉保健局研修センター１階講堂（文京区小日向）で表彰式が行われ、有田英子麻酔科・痛みセンター長、石井健集中治療部副部長、請田早苗救急部看護師長は、東京消防庁本郷消防署長から救急業務協力者として感謝状が授与された。美馬和男放射線部技師長、湯浅薫検査部主任検査技師は、文京区救急業務連絡協議会長から救急業務功労者として表彰された。

**9月14日（水）第9回東大研究倫理セミナー**

時間：
第Ⅰ部（更新受講者対象）：17：00～17：30
第Ⅱ部（新規受講者必修；更新受講者任意）：
17：40～18：10
第Ⅲ部（新規受講者対象）：18：15～19：30
場所：医学部鉄門記念講堂（教育研究棟14階）
司会：赤林　朗（倫理委員会委員長）
徳永勝士（ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員長）
第Ⅰ部　更新受講者講習会
荒川義弘（病院臨床試験部副部長）
（休憩）
第Ⅱ部　基調講演
（新規受講者は必修、更新受講者は任意）
「研究発表の倫理ー科学者の不正行為と社会的責任」
赤林　朗（医療倫理学、生命・医療倫理人材養成ユニット）
第Ⅲ部　新規受講者講習会
1 各種指針と医学系研究科・医学部における研究倫理審査体制
赤林　朗（医学系研究科・医学部倫理委員会委員長）
2 研究倫理審査を受けるための手続き
徳永勝士（ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会委員長）
3 臨床研究における個人情報管理
大江和彦（ヒトゲノム・遺伝子解析研究個人情報管理者、病院医療情報管理委員会委員長）
4 病院治験審査委員会への申請と臨床試験部の支援
荒川義弘
まとめ　赤林　朗
主催：医学系研究科・医学部倫理委員会、ヒトゲノム・遺伝子解析研究倫理審査委員会、病院治験審査委員会、病院臨床試験部、病院企画情報運営部、病院総合研修センター

**9月16日（金）**
**平成17年度自衛消防隊操法大会**

時　間：12：00～16：30
場　所：東京都立駒込病院駐車場（文京区本駒込）
出場隊：本院からは3人操法（男子）、同（女子）及び1人操法（男子）の3隊が出場して自衛消防活動技術の確認と日頃の成果を披露した。

**9月30日（金）**
**病理部創立30周年記念式典**

場　所：赤門学士会館分館
（詳細は病理部創立30周年記念式典掲載ページ参照）

**10月5日（水）**
**イラク共和国保健省代表団東大病院見学**

イラク共和国保健省代表団の日本訪問に際し、本院の見学が行われた。
見学者：保健省副大臣
アマール・アル・サファー氏
保健省調達局副局長、医薬品・医療材料部
ナジール・ジャベル・シャハル氏
保健省国立核医学病院
アビド・アリ・カディム氏
保健省救急医療専門医
サバー・Ｎ・アワド氏
日本・イラク医学協会イラク人スタッフ代表
ハシム・アハメド氏

**10月6日（木）**
**第12回再生医学カンファランス**

時間：18：00～19：00
場所：入院棟Ａ15階大会議室
演題：ヒト脂肪由来未分化間葉系幹細胞とPRP の併用培養による骨再生医療
担当：神戸大学大学院医学系研究科器官治療医学講座顎口腔機能学分野　助手
綿谷早苗氏
（ティッシュ・エンジニアリング部）

**10月7日（金）～10日（月）**
**泌尿器科手術風景と NZ の夕陽**
**（画／後藤和雄氏）**
時間：10：00～19：00（9日（日）は18：30終了）
場所：入院棟Ａ1階レセプションルーム
監修：泌尿器科　北村唯一教授
共催：東京大学医学部附属病院

**10月18（火）**
**患者様のための転倒防止セミナー**
時間：16：30～17：30
場所：入院棟Ａレセプションルーム
演題：ころばないために
講演：1. 転ばないために（危険要因と予防法）
老年病内科　塩之入医師
2. 転ばないために気を付けたい薬
薬剤部　岩井薬剤師
3. 転倒予防（今日から出来ること）
リハビリテーション部　高橋理学療法士
4. 日常生活で注意したいこと
看護部　石原看護師
（看護部安全委員会）

**10月22日（土）**
**検査部創立50周年記念式典**
時間：16：00～18：00
場所：学士会館
（詳細は、検査部創立50周年記念式典掲載ページ参照）

# 東大病院の四季

## 秋の彩り
（はぜの木の紅葉）

秋の深まりとともに、院内の木々の紅葉と青空が色鮮やかになり入院棟 B と立体駐車場の間に挟まれた、中庭に『はぜの木』が一際赤色の鮮やかな色彩を放っております。東大キャンパスの中でまず最初に紅葉するのは入院棟 A と入院棟 B の間にある古い建物の屋上庭園の、はぜの木の葉です。周囲の樹木の葉がまだ緑である中にはぜの木が、まず先に紅葉し東大病院の秋が始まります。

その雌株には、ロウを取る灰白色の小果が実り、電球が普及するまでは和蝋燭の原料として広く知られておりました。はぜの木の紅葉が終る頃東大キャンパスの銀杏の葉が一斉に黄色く色づきます。

**10月24日（月）～28日（金）**
**東大病院第8回食事療法展**
「はじめませんか？食事改革」
時間：9：00～17：00
場所：入院棟A 1階レセプションルーム
展示：・外食について
・お菓子について
・清涼飲料、お酒について
・食塩について
・油脂について
・食物繊維について
・1400Kcalの食事
栄養ミニ講習会：
24日（月）食塩について
25日（火）脂質について
26日（水）食物繊維について
27日（木）外食について
28日（金）菓子・アルコールについて
体験コーナー：・体脂肪測定
・血圧測定
・血糖測定
（栄養管理室）

**10月27日（木）**
**リスクマネジメント研修（講演会）**
時間：18：30～20：00
場所：入院棟Ａ15階大会議室
講師：四谷メディカルキューブきずの小さな手術センター外科部長　梅澤昭子氏
演題：組織横断的な医療安全推進活動
（医療安全管理対策室）

## 平成17年度第1回「東京大学総長賞」受賞する

**【個人の部】**

**脳神経外科　宮本伸哉 先生（医学系研究科博士認程 3 年）**

宮本氏は親の運転する自転車に取り付けられた補助椅子に乗せられて怪我をする小児が急増していることの重大性にいち早く着目し、実態調査により学会、論文を始め広く社会に訴えてきた。この活動により、本問題はひとつの社会問題となり、各種報道機関に取り上げられるとともに、国会、都議会をはじめ多くの地方公共団体にて本問題と今後の対策に関して議論された。その結果、各地で警察による安全講習会や自治体によるキャンペーン活動等が行われることとなった。また、（財）製品安全協会の小児用自転車ヘルメットの SG マークの新たな認定や数社の自転車、小児用自転車ヘルメットの開発にも協力するなど、医療を通じて、広く社会に貢献したことが高く評価された。

（総長賞パンフレットより引用）

発　　行　平成17年11月30日
発 行 人　永 井 良 三
発 行 所　東京大学医学部附属病院
〒113-8655　東京都文京区本郷7-3-1
TEL 3815-5411
「東大病院だより」編集委員会
編集委員長　加 我 君 孝
事 務 担 当　東大病院広報企画部
総務課総務企画チーム庶務担当
連絡先　TEL 5800-9769
E-mail: SyomuAll@adm.h.u-tokyo.ac.jp
印 刷 所　株式会社　学 術 社

**東大病院だよりは、東大病院のホームページから見ることができます。　http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm**
**また東大病院だよりは、年 4 回発行し、外来診療棟 1 階ロビー、入院棟 A 1 階ロビーのパンフレットスタンドから自由にお持ちいただけるよう情報提供を進めておりますが残部には限りのあることをご了承下さい。**